

的研究の先導的業績をあげられ、また大気汚染に関係する境界層、局地循環の研究を推進されました。

松本誠一会員：

気象研究所、気象庁において、日本の総観規模及びメソスケール擾乱を対象とする研究を推進され、1960～70年代における北陸豪雪、梅雨末期豪雨等観測プロジェクトの実施と、その観測成果に基づく先導的研究業績をあげられました。

真鍋淑郎会員：

米国地球流体力学研究所(GFDL)等において、大気大循環モデルへの放射対流平衡、積雲パラメトリゼーション(湿潤対流調節)、水文過程の導入による大気大

循環の研究、海洋大気結合モデルによる気候変動の研究、温室効果気体増加による気候変化予測など先導的業績をあげられました。

なお、次の方々が、これまでに名誉会員に選ばれておられます。

☆佐藤順一会員、☆和達清夫会員、☆畠山久尚会員、☆正野重方会員、☆山本義一会員、☆高橋浩一郎会員、☆吉武素二会員、☆藤田哲也会員(☆印は故人)

荒川昭夫会員、磯野謙治会員、小倉義光会員、笠原 彰会員、岸保勲三郎会員、都田菊郎会員、村上多喜雄会員、山元龍三郎会員、

日本気象学会による地球環境問題への取り組みについて —地球環境問題委員会の発足—

数年前に「地球環境科学関連学会協議会」が結成され学会レベルでの地球環境問題への関心が高まってきたなかで、平成11年の「日本気象学会評議員会」の席上で示された地球温暖化をはじめとするグローバル規模で顕在化しつつある環境問題に関する関心の高さを契機として、「日本気象学会理事会」を中心に地球環境問題への取り組みの気運が生まれてきました。その後、気象学会の総合計画委員会委員に数人の気象学会員を加えてワーキング・グループをつくって議論を重ね、その結果を平成12年の評議員会に報告し、気象学会として地球環境問題に取り組む決意を表明しました。平成12年5月の理事会において、「地球環境問題委員会」を新しく理事会のなかに置くことが正式に決まりました。少し遅れましたが気象学会員の皆様にお知らせします。

地球環境問題委員会は社会に向けた諸活動に専念するという原則的立場をとることを当面の条件としております。地球環境問題に対する社会の関心は高く、その内容は自然科学から工学、社会・人文科学の関連分

野まで広範囲に亘っておりますが、気象学会としては、人間活動が関わる地球環境変動の実態と将来への影響などに関して気象学・気候学の立場から社会に正しく伝えていくことが重要と考えております。これは、広い意味での社会啓発活動であり、具体的には出版物の刊行、マスコミとの連携、社会人向けの公開講座などが含まれますが、新しい活動形態も今後検討していくつもりでおります。

地球環境問題委員会の構成は、木田秀次(理事：京大理学研究科)、住 明正(理事：東大CCSR)、近藤豊(理事：東大先端研)、笹野泰弘(国立環境研)、野田 彰(気象研)、沖 大幹(東大生産研)、森田恒幸(国立環境研)、田中 浩(理事：名大環境学研究科：委員長)の8人で構成されています。生まれたばかりの組織ですが今後の発展のためにも、気象学会員各位の広範な支援を切に期待するものであります。

日本気象学会地球環境問題委員会
(文責：田中 浩)